

ロータリーライフを振り返って

田 中 毅

借家で診ていた診療所が狭くなったので、芦屋の国道筋に新しい診療所兼居宅を建てた頃、突然長老のロータリアンが来訪されて、芦屋ロータリークラブに入会を勧められました。本来ならば上場企業からしか採用しないのだが、年寄りばかりになったので特別に若い幹事を務めるようにとのお達しがあったのは、私が 37 歳のときであった。

周りは有名企業の社長ばかりだし、何もわからずに途方に暮れていると、後にガバナーを務められた安福さんが、今度「関西ロータリー研究会」を創るので、そこで勉強するように勧められ、渡りに船と約 15 年通い続けました。

その間、1972 年と 76 年に幹事、88 年に会長を務めました。実践派だった私として、親睦中心のクラブの雰囲気と会わず、同じ悩みを抱いていた友人を誘って、1990 年に芦屋川ロータリークラブを作りました。バブルの絶頂期とあって活気に溢れ、WCS などの実践活動に明け暮れていましたら、1995 年に突如阪神大震災に襲われ、例会場も事務局も全壊しましたが、その間一回も休むことなく例会を続けました。

私も診療所が全壊したのでボランティア活動に専念し、芦屋市がチャーターしたフェリーに船医として勤務していたところ、突然ガバナーの指名を受けました。今から考えると会員が全員被災者であるという高揚感と連帯感が、ガバナー受諾を可能にしたのだと思います。

ガバナーが済んでからクラブの緊張感が一気に崩れました。有力会員が相次いで逝去したり、バブル崩壊により退会する会員も続出し、まとめ役である私自身も、地区内外からの講演依頼に忙殺されてクラブ出席もままならないまま、遂に 2004 年に心筋梗塞、翌年には脊椎管狭窄と大動脈解離で倒れて、出席免除を巡って紛争の結果、クラブを退会する結果になりました。

ところが、すでに講演を以来されている地区やクラブが沢山あったため、ロータリーを退会した身分では引き受けるわけにもゆかず、尼崎西クラブの好意によって再入会したわけです。

現在はパーキンソン病を宣告されたため身体が言うことをきかないので、ロータリーに奉仕理念を提唱したのは経営学者アーサー・フレデリック・シェルドンであることから、アメリカやイギリスの古本屋のネットワークを通じて現存するすべての文献を収集し、それを翻訳したり、さらに日米のロータリーに関する貴重な文献をデジタル化して、インターネット上に保存する作業に取り組んでいます。